

台湾茶の歴史を訪ねる 第七回

(7) 日本統治時代 台湾にも緑茶があった？！



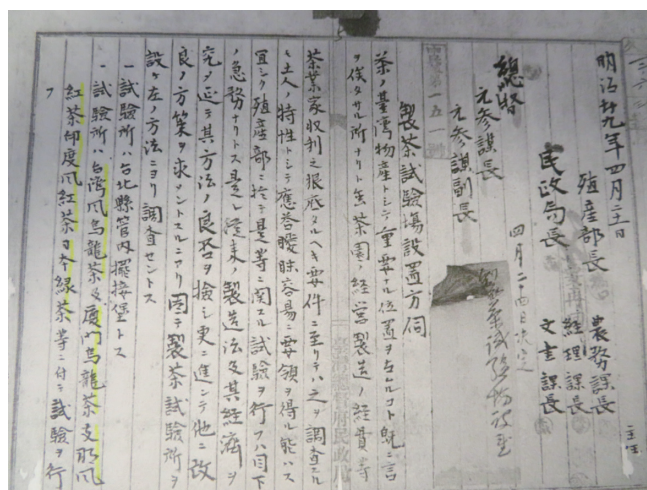
須賀 努 (コラムニスト / 茶旅人)

『台湾緑茶の歴史』を勉強したいというと、日本人だけではなく、一般の台湾人からも『台湾にも緑茶があったのか？』と疑問を呈されることが何度もあった。中には『そういえば最近三峡辺りに碧螺春という緑茶があるよね』と教えてくれる人はいても、100年前の歴史を語る人は殆どいない。今回は謎の緑茶に迫ってみたい。

台湾緑茶の発祥はどこ

台湾に緑茶があったとしたら、一体どこが発祥なのだろうか。実に様々な人に聞いてみたが、茶をよく知っている方でも光復後の緑茶の歴史を教えてくれるに過ぎない。または『緑茶は中国でも主流だったのだから、清朝時代からあったに違いない』という推測を聞くことはあっても、具体的な話は出てこない。

ようやく辿り着いたのが、日本統治時代が始まってすぐの1896年。後に製茶試験場初代場長となる藤江勝太郎がその年の5月から紅茶、烏龍茶と共に緑茶の試験栽培をしたという記述だった。台湾統治開始からわずか1年、日本の緑茶製造が台湾に向いているのか、その品質と商業採算性を確かめる試験は急務だったようだ。その年に



1896年に出された試験場設置伺

提出された試験場設置伺を見ても、紅茶や烏龍茶と並んで、『日本緑茶』という項目がある。試験場開設の7年も前にはすでにことは始まっていたのだ。

1902年には生産した台湾緑茶サンプルを横浜の茶商大谷嘉兵衛に送ったとの新聞記事も見つかった。大谷は『蒸し方が不十分ながら品質は良好であり、内地でも一定の価格は取れるだろう。輸出仕様の包装をすること』と評価したらしい。大谷嘉兵衛と言えば、日本でも有力な茶商として知られ、1894年には日本製茶株式会社を設立し、外国商人を介さない茶貿易を行っていた人物だから、この評価に台湾の作り手は勢いづいたに違いない。

ただこれまではあくまでも試験であり、本格的栽培が開始された場所は別にあった。苗栗の三叉河(三義)！それは1903年に製茶試験場が開設され、1904年に試作が始まったらしい。試験場が確保した栽培地、その場所が苗栗三叉河だというのが、

なぜこの地で緑茶製造が始まったのか。元々小規模ながら茶業が行われていたようだが、どうやらその土地柄、当時の主力商品であった烏龍茶生産には向いておらず、紅茶か緑茶がよい、とされ



現在の三峡碧螺春

たかららしい。尚当時三叉河と銅鑼湾の2か所に茶畑はあったようだが、銅鑼湾の茶葉は緑茶より紅茶に適しているとして、最終的に緑茶は三叉河に絞られたという。

最も早い緑茶の製造販売請負人は、苗栗庁長兼農会会長の家永泰吉郎だったという話もあった。家永泰吉郎(1868-1915)は、佐賀の士族出身。大分県尋常中学教諭から、1895年に陸軍省雇員を命じられ、日本統治が始まってすぐの基隆に到着、1896年台北支庁書記官、1901年に苗栗庁長となり、その後1909年より新竹庁長と要職を歴任し、1914年に退官している。

家永は統治初期の台湾で、苗栗の開拓に力を入れていたのであろう。士族らしく蛮人討伐などでも隊長を務めるなど、苗栗及び新竹の初期開発に精力的に注力した中心人物として登場する。行政の変更により新竹に移る際には、苗栗庁と農会も新竹の傘下に組み込まれたことから、この地区の茶業を含めて農業全般の拡張に大いに貢献が認められていたことを示している。

1905年頃から苗栗農会三叉河支会で緑茶製造講習会が開かれ、1908年以前には苗栗農会により製茶試験場及び伝習所が設けられ、日本人製茶師2名が渡台して指導に当たっていたとの記載もあった。この緑茶は蒸し製で、内地から送られてくる茶の代替品を狙ったという。因みに1907年には試験場の記録に75斤の緑茶が製造されたことあったことから、恐らくこのあたりが緑茶の始まりではなかろうか。

## 緑茶の商業生産が始まるも

ちょうどその頃、台湾に進出していた京都の辻利が『苗栗庁農会製造、三叉河の緑茶、新茶発売』の広告を打ったのは1908年のこと。少なくともこの事実をもって、小規模ながら緑茶の商業生産は始まった、と言ってよいかと思う。1899年、後に民間総督とも称された三好徳三郎が台北に辻利茶舗を開業した。当初は台湾在住日本人向けに宇

治茶などを販売しており、同時に台湾茶の輸出も目論んでいたようだが、この時期は台湾産緑茶にも目を付けており、日本内地にもサンプルを送り、その販売ルートを探っていたらしい。

当時の新聞記事によれば、日本に送られた台湾緑茶の品質は決して悪くなかったが、台湾産というだけで、価格は一段低く見積もられてしまったという。但し生産コストも低いので儲けは出るが、生産規模が小さく、商売にはならなかったのかもしれない。

三好徳三郎については、単なる一茶業者の枠をはるかに超え、政財界との幅広い人脈を持ち、台湾統治全般に尽力した人物と言われているので、後日機会があれば、別項目として取り上げたいと思っている。最近発見した茶に関する事柄としては、前回紹介した台湾包種茶と沖縄の関係の中で『日本統治時代、台湾包種茶を沖縄に輸出する交渉を沖縄県知事としたのは三好徳三郎である』とされており、事実1916年に県知事に台湾茶を売り込んだとの記事が掲載されていた。その後1930年代には中国からの輸入を全て台湾産に切り替えられていることから、当時相当の政治力を持っていたと考えられる。

1908年頃になると、基隆や北投などでも緑茶生産が小規模に始められたようだ。これは三叉河の成功に刺激されてのことだったと想像される。北投では西村某氏、基隆では大石勝三郎氏が緑茶を製造して、その品質は良好だったとの新聞記事が見付かっているが、その実態と結末はよくわからない。

因みに三叉河には茶樹栽培試験場が設置され、1909年に製茶試験場の付属機関となり、1910年から4年間、主に肥料などに関する調査が行われたとある。その試験報告の中に、紅茶と緑茶の比較表などが具体的に記載されていることから、この時点では台湾で緑茶を製造する意思が感じ取れる。また三叉河一体の茶農家が、試験場から製造業務を引き継いだ日本台湾茶業(1910年設立)に茶葉を供給していたとの話もあったが、この一部

が緑茶製造に使われた様だ。

1910年に行われた藤江勝太郎のインタビューが見付かった。藤江は製茶試験場の初代場長だが、この年試験場の生産部分が日本台湾茶業に委託される過程で、同社の専務取締役（実質的な責任者）に就任している。彼は試験場時代から『ロシア向け紅茶輸出』を念頭に紅茶作りを行っており（1906年に輸出実績あり）、同社においても紅茶生産に注力していく方針だった。そして産量の少ない緑茶を『品質は悪くないが到底そろばんが合わない』として切り捨てている。当時の彼の影響力は相当に大きいと考えられることから、この時点で苗栗の緑茶生産の拡大は無くなったとみてよい。

そして翌1911年、その藤江自身が紅茶生産不足による損失、会社の業績不振の責任を取り、辞任しているのは何とも皮肉だ。その後も細々と緑茶生産は続けられていくが、日本台湾茶業では成功しなかった紅茶生産は、三井に引き継がれ、やがて日東紅茶生産の一大拠点となっていくことになる。

台中から台鐵の区間車で北上した。トンネルを抜けて苗栗県に入った最初の駅が三義だった。ここに来ると台中以南とは空気が全く違うと感じる。この駅が1903年に開設された三叉河駅だった。3つの河が合流するこの地、日本統治時代には、この駅前には殆どが三井の茶工場であり、三峡の大寮、桃園の大溪と並ぶ、日東紅茶の主力工場



苗栗三叉河 旧三井工場

があったところだ。1980年代前半に旧工場は取り壊され、土地は売却され、現在茶工場の痕跡などは残念ながら全く残っていない。僅かに残された写真を見ると木造2階建てのきれいな造りに往時が偲ばれた。

日本時代、祖父と父が三井の工場で茶作りをしており、光復後台湾農林となったこの工場で作りを続けたという蘇さん（75歳）に話を聞いてみた。蘇さんは退職後も毎日現在の茶工場に上がってきて、製茶状況を見るのを日課としているほど、茶作りに情熱を持っている人である。

『三井の時から、この地ではずっと紅茶を作ってきた。光復後も品種を大葉種のアッサムから小葉種の青心大有に切り替えたが、作ったのは紅茶だった。紅茶輸出がダメになって、花を交ぜるための包種茶（原料）を作った』との話は出たが、三井以前に緑茶を作っていた話など、祖父からも父からも一度も聞いたことはない、ときっぱり言われてしまった。三代に渡り茶作りを行ってきた人でも、緑茶製造のことも、この地に製茶試験場や伝習所があり、緑茶製造講習会が開かれたという歴史も全く知らないとはどういうことだろうか。どこかで歴史は消されてしまったのか。

そのヒントとして、三叉河の土地制度が挙げられている。農民が農会の名のもとに土地を収奪され、争議に発展したという事例として、新竹、苗栗三叉河が報じられており、このような過去に関して日本人は口をつぐみ、現地でも悪い話は忘れ去られた、ということかもしれない。この件については別途調べてみたいと思っている。

尚台湾の茶業界では、桃園・新竹・苗栗の3つを合わせて、『桃・竹・苗』という言葉がよく出てくる。これは現在では東方美人の産地などを指す時にも使われるが、往時の一大茶産地を指す言葉でもある。またこの付近の茶農家は客家が多く、客家の居住地と茶産地が重なっていることも、単なる偶然とは思われない。

客家は中国広東省あたりから渡って来た者が多



苗栗三叉河 台湾農林蘇元副場長と魏科長

いと言われるが、広東省の客家居住地域には昔から製茶の習慣があり、作られていた茶も晒青緑茶など、緑茶だったとの説がある。彼らの中で、広東の緑茶製造の技術を持ち、台湾に渡る際、茶の種などを持ち込み、台湾で清朝時代に緑茶を作っていた可能性は否定できない。但しこれまでの調べで、そのような事実は確認できず、不確かな逸話として、話を聞くことがある程度のため、台湾緑茶の起源は現時点で、日本統治後の苗栗だと思っている。

## 光復までの緑茶

1919年に初めて台湾から緑茶が輸出されたとの情報もあったが確認できなかった。そしてその後台湾で緑茶の話は殆ど資料から消えてしまっている。これは基本的に、『台湾で生産された緑茶の質は悪くないが、日本内地との競合を避けるため生産量を抑えた』のではないかと推測されている。そして台湾で生産された少量の緑茶は、台湾在住日本人向けであったと考える。

また茶業改良場の図書室に眠っていた『参考書綴(大正七年一月以降)』の中に、報告者不明ながら、『本島ニ於テ緑茶製造ノ盛ナラザル理由』と題する報告書があった。大正七年は1918年に当たるのでその頃書かれたと思われるが、その理由として①本島人が緑茶の経験に乏しいこと②風土の関係上緑茶に適していないこと③本島に於ける茶樹品種が緑茶に不適である、の3つを挙げ、その

上で『偶々緑茶を製造しても島内需要を充たす他は、取引商人も殆ど皆無の状態』と説明している。

1920年、日本台湾茶を引き継いだ、台湾拓殖製茶が島内需要に合わせた緑茶生産を行っていたとの記載はあったがかなり小規模だったであろう。別の資料としては、1922年に開催された台湾製茶品評会の入賞者一覧がある。この会は茶商公会が主催し、かなり大規模に行われたようで、台湾全土から出品があった。前回紹介した台湾包種茶を開発したとされる魏静時や王水錦などの名前も見え、烏龍茶と包種茶の入賞が殆どである中、三等賞の欄に苗栗郡の福壽園製茶所という名前が見られる。

これはあの京都の福寿園と関係があるのだろうか。京都本社に問い合わせたところ『現時点で福寿園が台湾で茶を生産したとの記録はなく、日本から茶を送り、台湾に特約店を持っていたことのみが判明している』との回答を得た。因みにその特約店の看板を見てみると『松茂園茶舗』という名前が見え、検索したところ、その所在地は何と苗栗三叉河だと分かった。だが現地の茶業関係者に聞いてみても、その名前に覚えのある人はおらず、恐らくは日本時代の終焉と共に店を閉めたのではないかと推測する。

何故福寿園のような老舗が、茶の販売をするのに、台北や台南などの大都市ではなく、この田舎



茶業改良場 図書室

